

千葉職対連ニュース

発行 千葉労災職業病対策連絡会

〒262-0032 千葉市花見川区幕張町 4-524-2

千葉民医連事務センタービル 2F

TEL/FAX 043-273-9199

E-mail : chiba_syokutairen@ybb.ne.jp

HP : <https://chiba-syokutairen.org/>

歴史をきさむ佐倉城址で 満開の花見を堪能

開催予定を寒さ故に4月に延期した今年の千葉職対連の花見は、今までで一番恵まれた花見だったかもしれません。たかが花見かもしれませんが人生に潤いをもたらす年輪を刻むことになるのです。満開の花、あたたかな陽気、吹く風は爽やか、ときどき散る花びらは昔一緒にめでた門間さんを思い起こさせます。実質的に花見を成功させたのは広場に朝早く来て御座敷を設置してくださる猪俣さん、料理を趣味にする広田さんの手料理、新鮮でおいしい刺身を持参する脇村さんたちです。地元の吉川さんも顔を出してくれて、10人の参加でした。

春4月は出会いの季節です。学校でも会社でも新たな人との出会いが始まります。そんな出会いは国内だけではなく世界に向けて可能にしたのがお城の主・佐倉藩主堀田正睦です。幕末に活躍した彼の銅像が佐倉城本丸入り口に建っています。アメリカ代表のハリスの銅像も並んでいます。それまでは長崎だけに限られていた交易港に新たに横浜、函館が追加されました。それから160年、今日にいたるまでの毎年佐倉城は春をどのように迎えてきたのでしょうか。

(網野)



「明治維新」と「日本破滅」との関係

(その6)

最後に明治維新の教育制度のついて説明します。
「明治維新」から「太平洋戦争敗戦」までの「教育制度変遷」の概要

この80年間を「教師、教科書」の両面から概括すると次の3期間に区別されるようです。

<1期目>

明治初めからほぼ明治20年ころまで。

この最初の期間では、特定の教科書は使用されていません。西洋書物を翻訳しそれを教科書として利用していました。その期間の教師は、師範学校などの「養成所出身者」が務めるのではなく、江戸時代の延長上そのまま、たとえば、寺子屋師匠、僧侶、神官、士族と分類される元武士が身に着いた教養を利用して教師を務めました。特徴的なのはこの期間の教師を多くの士族が務めたのですが、これ以降に現れる「師範タイプ」*と呼ばれる教師とは一線を画しています。ここ

までの教育はレベルは高くはなくても誠実な国民づくりに貢献しています。士族教師には「次世代の国民を育てる」という「崇高な使命」を自覚した教師が自信をもって教壇に立っていたようです。

この最初の期間に学んだ夏目漱石は、比較的自由的な教育を受けることが出来たようです。彼が受けた教育は明治時代における「進級と席次」を試験で争う競争教育が始まる時代でした。「人間の価値」が「身分や家格」で決まっていた封建時代とは異なり、その人の持つ「能力・才能」というものが重視されるという明治時代になりました。競争が少なかった封建時代とは異なり、明治の教育は「試験成績」による激しい競争となりました。この学校教育制度は明治5年に設けられて以来安定することなく制度改変がしばしば繰り返されました。

(裏面へつづく)

夏目漱石が入学したころは、明治初めですが、小学校は「上下4年」の「下等小学校、上等小学校」に分類されており、漱石は5歳で下町の「下等小学校」「第8等級」に入学しています。下等小学校では順調に進級すると、4年目後半の「第一等級」で卒業となります。しかし「進級」しないと「留年」になり、逆に臨時試験に合格すると上の等級へと進級することも可能でした。この頃は学校の教育予算が、国により賄われるのではなく、あくまでも生徒の保護者や地域篤志家の寄付により賄われる時代だったようです。従って授業料を払って入学できる生徒は少なく、入学しても上級へ進級できず留年すると、授業料が払えなくなり、退学する生徒が続出したようです。はじめ100人入学しても卒業するのは、その中の1,2人だったという小学校もあったようです。日本全国で大学区、中学区、小学区に分けられ、その数が決められました。

＊参考情報：「師範タイプ」の教師

元士族などの教師に対して次に現れる「師範タイプ」教師というのは、「軍隊式」に育成され、士族教師にくらべ萎縮していたようです。現代の目からみれば教師としては失格だと思いますが、「師範タイプ」の教師は「自由性の喪失、形式主義、画一主義、肩にはまった人間」と批評されました。明治から昭和までの大言論人の徳富蘇峰は「小学教員問題（明治36年）」のなかで述べています。「世の中には自分の職業を偉そうに思うものと自分の職業を卑下するものとの二つがある。後者の例として小学校の教員の例をあげている」。その一方、明治10年代は政府が教育者に対して「尊敬の態度」をもっていたことを物語る田中文部大輔の例があります。「学者教育者は決して役人扱いしない。役人というものは一意専心、上官の命令に服従して働くべきものである。しかるに学者教育者は決して他の指揮命令を奉ずべきものではなく、あくまで

も独立の思想を以って自身の良心により自信をもって国家に貢献すべきものである」。

しかしこの考えは、明治中期になると無くなり、それ以降の勅令の上意下達方式に代わりました。「かかる教育形態の中で占める教師の地位、役割は、ただ国民への媒介者にすぎず、政府の教育政策によって命令のまま忠実従順に動けばよかった」のです。「上意下達」、命令に「絶対服従」の教育は軍隊と同じでした。反論や異論、質問や思考を許さない教育では、すでに述べた人間の発達過程に対する教育的配慮はまったくありません。生徒をただ「皇国史観」一色に染めあげる「画一的教育」が一貫して行われました。このような教師にとって恐ろしいのはその上司である視学官や村長でした。某視学は教師を監督する秘訣「一人の牧者が数千の羊群を思うように連れまわる秘法」と語っています。

（「教育学概論」小野久三著）

補足説明：師範タイプ教師の育成状況

師範学校での教育は、文部省直轄であり寮生活を基本として24時間、軍隊同様の監視下に置かれ、教師が監視養成されました。そこでは不純な考え方に触れるのを極度に恐れ、新聞も小説も読むことを禁じられたばかりか、時には帰郷することも許されなかったのです。帰郷した家庭でもし世間の常識・考えに触れる恐れがあるからという理由でした。「戦争国家」特有の「しぼり」、そして「上意下達」問題が学校教育でも起こり、教師は「上から伝わってきたものをそのまま教える」という教育とは無縁のような形が出現しました。第一次伊藤内閣の文部大臣を務めた薩摩出身の森有礼がそれを導入したのですが、彼の評判はひどく悪くて「最も教育にふさわしくない人」と評価されていました。戦後の教育では禁止される行政の介入が、明治新政府の学校教育では、100%行われていたのです。これは日本の学校教育や教育学、歴史学に甚大な影響を与え続け、これが日本の人材育成では大きな欠陥になったと考えられます。（次号へつづく）

当面の取組日程

千葉職対連事務局

2019年

4・17(水)	千葉職対連常任幹事会	17:30~	千葉民医連事務センター
20(土)	労災職業病なんでも相談会	13:00~	千葉市中央コミュニティセンター
5・1(水)	千葉メーデー	10:30~	千葉中央公園
3(金)	憲法記念日の集い	14:00~	千葉市文化センター
8(水)	いの健千葉常任理事会	18:15~	自治体福祉センター
15(水)	千葉職対連常任幹事会	17:30~	千葉民医連事務センター
19(日)	いの健千葉第21回総会	13:00~	船橋市勤労市民センター
25(土)	労災職業病なんでも相談会	13:00~	船橋市勤労市民センター
28(火)	県職員公務災害裁判	10:30~	千葉地裁603号法廷
6・1(土)	メンタル・労災センター事例検討会	14:00~	未定
12(水)	いの健千葉常任理事会	18:15~	自治体福祉センター
19(水)	千葉職対連常任幹事会	17:30~	千葉民医連事務センター
29(土)	労災職業病なんでも相談会	13:00~	千葉市中央コミュニティセンター